
論 説

大学博物館における社会連携：京都大学総合博物館を例に

大野照文

京都大学総合博物館

Openness to the public supports the sustainability of university museums: an example from the Kyoto University Museum

Terufumi Ohno

The Kyoto University Museum, Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan (ohno@inet.museum.kyoto-u.ac.jp)

Abstract. The Kyoto University Museum, established in 1997, has been putting emphasis on openness of the museum to the public. To make tax-payers understanding the importance of the museum's mission, including collecting, storing, and maintaining invaluable specimens and cultural heritages as well as curating them for research and educational purposes, it is necessary to open museum's door more widely to the citizens and provide them with various opportunities for life-long learning. Through such activities, we can expect the citizen's proper understanding and support for the museums important missions. Here I report our ten years experience in supporting citizen's life-long learning, including planning and operating public events, making original learning programs in cooperation with specialists of museum learning, webbing network with people and organizations cooperating with us.

Key words: university museum, missions, accountability, gaining peoples support, life long learning

はじめに

京都大学総合博物館は、平成9年4月に発足した。京都大学が100年にわたる歴史の中で収集した250万点（当時）の学術標本資料を収蔵・保管し、研究・教育に活用し、社会への情報発信を行うことを目的に設立された。また、京都大学総合博物館と相前後して全国の主要な大学にも博物館組織が創設された（Normile, 2001）。当時、主要な大学は、ほぼ100年の歴史の中で収集されてきた学術標本資料について、その保全すらおぼつかないという大きな問題に直面しており、この状況の打開のために文部省学術審議会・学術情報資料分科会学術資料部会が1996年「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という報告を行ったことがその背景にある。

この報告の特徴は、学術標本資料の保存・管理、研究・教育への活用の重要性が説かれるだけでなく、ユニバーシティ・ミュージアムを「社会に開かれた大学」の窓口ととらえて、展示等を通じた学術研究の成果の地域住民への積極的な公開・周知や、人々の生涯にわたる学習活動への積極的な協力など社会連携を強く勧めている点にある（この報告については、文化環境研究所が1999年12月に発行した「カルチペイト」第11号53-55ページに採録されて

いる）。筆者は組織の設立とともに専任教員として博物館に赴任して以来、大学博物館における社会連携のあり方を模索してきた。ここでは、組織の設立から10年、また常設展示場の一般向けオープンから6年がたった現在までの経験をもとに、大学博物館における社会連携の理念と実践について多少の考察を行ってみたい。

京都大学総合博物館は模範的博物館

京都大学総合博物館は現在260万点に上る学術標本資料を収蔵し、保存・管理・補修、閲覧、展示、研究や展示目的での貸し出しなど多様な業務を行っている。植物標本だけでも年間209件（2006年度）の閲覧に対応している。また、標本閲覧や検索の便を図ることを目的として年間数千点の標本について画像データベースへの入力を行っている。年2回の企画展については、それぞれ数年をかけて準備を行って開催している。さらに新たな収集品も年間10,000点近く受け入れている。その上、教員が研究し、学生の教育に携わることは当然の業務として遂行している。つまり、総合博物館はきわめて模範的な博物館であり、活発に活動している大学の組織の一つなのである。

生涯学習を要とした社会連携

生涯学習のお手伝い

研究者と楽しく学習

- ジュニア・レクチャー
- シニア・レクチャー
- 企画展・ガイドツアー
- 学習教室
- 週末子ども博物館・出張子ども博物館
- 科学探偵士・ITの達人の府下への派遣




学習教材の開発

ジュニア向け

- 三葉虫を調べよう
- 二枚貝を調べよう
- 生き物の歴史カレンダーをつくろう

シニア向け

- 貝体新書




ネットワーク

- 研究者・大学職員・大学生・大学院生・高校生
- HOP+H&D+斎藤麻紀+織谷仁美
- 京都府教育委員会
- 京都市教育委員会
- 京都市青少年科学センター
- ミュージアムショップ MUSEP
- 京都大学学術出版会
- 小学校教員グループ
- 京都大学記者クラブ




博物館の財産

貴重な標本群


研究者


展示


公共空間


図 1. 京都大学総合博物館における生涯学習を要とした社会連携の取り組みについての現状。

なぜ社会連携か

大学博物館には、その重要な役割にもかかわらず、標本の作製、維持管理に携わる技術職員や学芸員は配属されていない (Normile, 2001)。まして、展示や生涯学習サービスに携わるサイエンス・コミュニケーションの専門家もない。理想の博物館と現状との乖離は教員や職員がオーバーワークすることで埋めている。博物館は標本の倉庫程度との誤った通念を打ち破り、人材や設備、予算が理想的に配された博物館を実現するためには、大学の同僚に訴えることはもちろん、それ以上にモノに根ざした研究の楽しさを市民に親しく伝えることを通じて、博物館の重要性を社会全体に理解してもらうのが近道の一つである。

京都大学総合博物館のルーツは、1914年に文学部が作った陳列館にさかのぼる。陳列館の創設に力を注いだ考古学教室の初代教授浜田耕作（後に京都帝国大学の総長）は、「博物館」という著作の中で、博物館を案内する形で子どもたちを考古学にいざなっている。遺物を眼前に思い浮かべられるように描写するとともに、来歴や意味について平易に述べ、考古学の魅力を伝えることに成功している。これを良き手本として、総合博物館においても博物館の活動に対する理解と支援を広く市民から得ることを目的として社会連携の模索を真剣に開始した（大野，1998）。

社会連携の要は生涯学習

生涯学習は、体験・観察、推理・確かめを通じて身の回りの世界について深く理解し、発見し、知的好奇心を満たしてゆく行為である。同時に、発見する自分に感動を覚え、これがさらなる学習への大きな動機となる。大学の研究者の研究も、発見が「世界初」である点をのぞけば生涯学習と本質的には同じプロセスであり、発見の自信が新たな研究を動機づける点も生涯学習と同じである。そこで大学の研究ノウハウを応用することによって市民の生涯学習をお手伝いする社会連携は無理なく行えるはずである。

2002年3月、京都大学総合博物館では博物館と社会との連携について検討するために国際フォーラム「博物館と社会の共生関係を築く」を開催した（Ohno, 2002）。その結果、研究者・学生などの人的資源、研究成果、研究方法論、同定の確かな膨大な学術標本資料群など、大学には生涯学習支援のための豊富な資源があるとの認識に至った。さらに、ウィーン自然史博物館や韓国高麗大学博物館の例から、スタッフが不足していても工夫して館の内外とのネットワークを築くことで、講演会、学習教室、企画展などを含む生涯学習活動を効果的に行うことが可能であることも習った。このような分析に基づいて、総合博物館の社会連携の中心には生涯学習を据えた（図1）。

- 23 -

研究者の顔の見える情報発信

京都大学総合博物館での生涯学習の取り組みは、まず研究成果の蓄積およびそれに関わった人的資源を活用して研究成果をレクチャーや実習をとおしてわかりやすく伝えることから始まった。レクチャー形式のものには、研究者によるレクチャー・シリーズ、企画展のガイドツアーなどがある。また、実習形式のものには、学習教室、週末子ども博物館などがある。いずれの取り組みにおいても、研究者の顔が見える情報発信を心がけている。

レクチャー・シリーズ

文系から理系まで、第一線の研究者がわかりやすくその研究内容を紹介するもので、2002年7月6日、当時客員教授として総合博物館に滞在されていた大韓民国京北学校自然科学大学生物学科教授の朴宰弘先生による「鬱陵島の植物と山菜」というタイトルでの講演が最初である。初期の案内チラシには“honzo-e”というサブタイトルが控え目に書かれていた（京都大学総合博物館、2004）。市民がこぞって希有な物産・自然物を自慢し合った江戸時代の博物学ブームにあやかって、博物館を生き生きした場所にしたいとの夢が込められたものであった。数回の開催の後、レクチャー・シリーズの活気に鑑みてこのサブタイトルは外された。講師は学内外の著名な研究者から大学卒業したての学生まで多様で、要は優れた研究をしていることを基準に、そして研究の本質的なところをかみ砕いて話ができる人材を厳選して依頼している。外国人客員教授に依頼することもしばしばである（必ず通訳付き。日本語で話す講師もいる）。ほぼ毎月1回、週末に開催しているが、主な対象年齢層に合わせてジュニア・レクチャー、シニア・レクチャーという見出しをつけて広報している。ただし、ジュニア・レクチャーにも多くのシニアが参加するし、大学院の集中講義レベルのシニア・レクチャーに小学生が参加し、熱心にノートをとることもある。第一線の優れた研究者が工夫をすれば、年齢を超えてその楽しさを伝えうというのがレクチャー・シリーズ60回開催を通じての感想である。

企画展のガイドツアー

2004年にフィールド科学教育研究センターが企画した春季展「森と里と海のつながりー京大フィールド研の挑戦ー」では、展示担当教員が直接、来館者に展示解説する試みを行い大変好評であった（大野、2004）。これを受けて、以後の企画展では、週末に企画担当の教員や大学院生による展示解説が行われるようになった。研究者や大学院生から直接、解説を聞け、興味に応じた質問にも答えてもらえるので来館者には大変好評である。案内する教官や大学院生にとっても、難解な部分を指摘されるなど自分たちの研究成果をわかりやすく伝える訓練にもなると好評で、研究者と市民がお互いに高め合う場として機能している。

学習教室

オリジナルな学習教材を使ったものも含めて、小学校低学年から中学生向けに夏休みや冬休みに開催している。特に夏休みの教室は2007年で7回目を迎えたが、近年は「体験 EXPO」と名付け、毎回応募者が定員の3倍を超えるほどの人気イベントとして定着している。2007年は8月1日～5日にかけて開催したが、ロボットを組み立て、制御プログラムを書き込み、火星の地形に見立てたくぼみを避けてしてゴールに到達する腕を競う「火星探査ロボットを作ろう」から、京都の銘茶の産地宇治田原の名人を招いてお茶に親しむ「茶歌舞伎（きき茶）に挑戦！」まで、工学から自然、文化の幅広い分野にまたがる13のプログラムを展開し、連日子どもたちの歓声が博物館にこだました。

週末子ども博物館

2004年の春、当時理学研究科大学院生だった小出雅文君（現学校図書株式会社勤務）と情報学研究科の修士課程に入学したばかりの中川千種さんが「週末に子どもたちに標本を見せて大学の研究の面白さを伝えるような行事をしたい」と提案してくれたのがきっかけで始まった。京都の様々な大学から文・理・芸術の広い分野の博士、大学院生、学生が参加して、自主的に運営し、学内外の研究者の協力も得て毎週末に「週末子ども博物館」を開催している。自分たちが講師になって化石・骨格・押し葉などの標本や古地図、銅鐸の紙製模型などを博物館のロビーに持ち込み、来館する児童・生徒に学術標本資料をもとにした研究の楽しさを解説するもので、基礎から最前線まで、研究の楽しさをわかりやすく伝えるとともに、なぜ研究に興味を持ったのか、失敗談・苦労談なども交えて伝え、子どもたちの将来の目標となるような研究者像を伝えることもめざしている。標本や史資料を見せながら研究や野外調査について熱く語りかけるうちに子どもたちの目が輝き始めることがしばしばある。心に、感動とともに学びのモチベーションが生まれる瞬間である。講師も子どもたちを学びに導く能力が自分にあることを発見し驚く。博物館で講師と子どもたちの間に「学び」を巡って感動の共鳴が生まれているのである。この取り組みは多くのタウン誌・雑誌に取り上げられ、週末には親子連れの来館者がじわじわと増えている。子ども博物館の出張版として、出張子ども博物館がある。標本を持ち込んで小学校、公民館、保育園などで開催するもので、2006年度は7カ所で開催した。

オリジナル教材の制作

理想の生涯学習は、自分の体験・知識をもとに、推理・確かめを通じて身の回りの世界について新たな発見をすること、そして「発見する自分」を発見し感動する行為である。そして、世界と自分の発見の感動がさらなる学習へのモチベーションを高める。京都大学総合博物館では、大学の研究者のもつノウハウを生かして、オリジナルな生

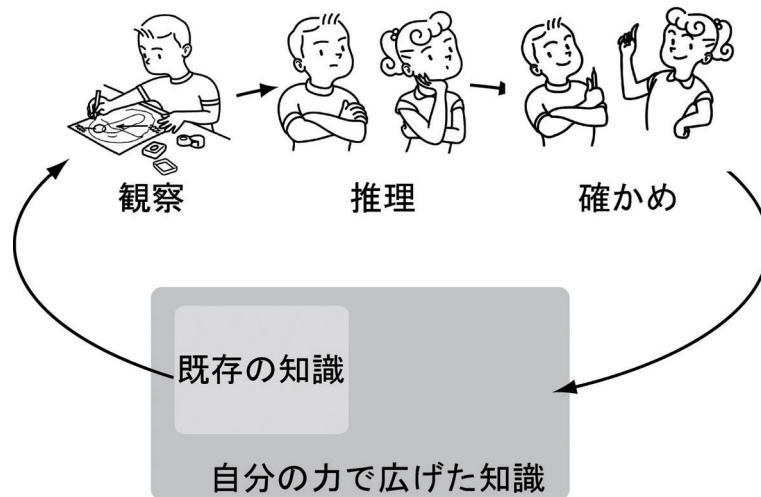


図2. 自発的学びを引き起こす学習プログラムのコンセプト。観察・推理・確かめのサイクルを繰り返して、自分の力で新しい発見の体験ができる。

涯学習プログラムを開発している（大野，2007a, b）。いずれも90分で完結するプログラムで、質問に対して自分で推理・確かめをして答えを見い出すというプロセスを何度も繰り返し、「発見する自分」を発見する感動を味わえるように作り込んである（図2）。過去6年かけて子ども向け3つ、大人向け1つ、合計4つの学習プログラムを完成している。子ども向けの「三葉虫を調べよう」（大野，2003a, b; 大野ほか，2003）と「二枚貝を調べよう」（大野ほか，2004）と名付けられた学習プログラムでは、推理のための前提として最初に30分ほどかけて観察を行う。

一方、大人向けのプログラムは「貝体新書」と命名され、二枚貝を題材とするが、知識を与えるのではなく、潮干狩りの体験、食材としての調理経験、寿司屋などでの食事の経験などを思い出して、二枚貝という動物の体の解剖学的特徴と生態を自分で推理し、確かめることを通じて、主体的な学び方を会得してもらう内容となっている。参加者の中には、自分の推理力のすばらしさや推理に役立つ人生体験・知識の蓄積の豊かさに気づき、自己肯定とともに生涯学習意欲をさらに深めて帰る人が続出している（大野・織谷・染川ほか，2006；大野・織谷・たけうちほか，2006；大野，2007c）。

上述の3つのプログラムは、分析的な能力を錬成することに主眼を置いているが、2006年に開発した子ども向け学習プログラムでは、新たな観点を入れ、90分で生命の歴史35億年を概観するものとした（大野，2007b）。動物は植物やシアノバクテリアより先に出現するはずがないこと、三葉虫（最初が多細胞動物の代表）には私たちとちがってエラがあることなどを手がかりに、子どもでも生命の歴史の重大イベントの出現順序を推理できることを体験させ、大局的にものを観ることの楽しさを身に着けることのできるプログラムである。事実、子どもたちは、地球の誕生・最初の生き物・最初の酸素を出す生き物・最

初の動物・最初の陸の植物・最初の陸の動物・恐竜の絶滅・最初のヒトの仲間・私の誕生というイベントの順序を正しく推理することができるようになる（大野，2007b）。

学習プログラムの開発はチームプレーで

オリジナル学習プログラムの開発には、博物館生涯学習プランナーの染川香澄氏が主宰するハンズ・オン・プランニングに属するデザイナーのたけうちかおる氏、博物館教育の研究者である小原千夏氏、展示プランナーの織谷仁美氏等、さらにはイラストレーターの西谷克司氏やテキスタイル作家の斎藤麻紀氏等とチームワークで取り組んでいる。開発過程では試行的な学習教室を何度も繰り返し、その都度徹底的な評価・検証を行う。言葉遣いや教室内での机や教材の配置に始まり、質問の仕方、理解度の把握、実習の流れなどについて徹底的な検証を行い、これによって教材の完成度を高めている。また、テキストやパワーポイント、二枚貝のぬいぐるみ模型などの制作にも、ほとんどの場合、チームのデザイナー、イラストレーター、テキスタイル作家が参画してくれるため、学習プログラムの意図がきちっと反映された、また造形的にも優れた高い品位のものとなっている。教材制作の上でデザイナーが果たす役割については、西谷克司（2007）に詳しい。

ほんの少しの努力の上乗せで親しみを最大に

上に述べたように、京都大学総合博物館の催しは練りにねった内容と選りすぐりの講師を用意して準備するが、参加者を得られなければ徒労に終わる。そこで、総合博物館では、博物館や京都大学のホームページ、チラシでの広報はもちろん、京都大学記者クラブへの広報依頼を通じて催しの周知徹底を図っている。さらに広報に際しては、プ

プログラムの内容とともに講師の人柄も伝わるように努力している。例えばレクチャー・シリーズのチラシでは、内容だけでなく、講師からの 100 字程度のメッセージをポートレートとともに掲載している。催しの開始前から参加者に講師に対する近親感を持ってもらうことができ、アットホームな雰囲気の中でレクチャーが進行し、参加者・講師ともに達成感の高い催しとなる。

企画展でも数年にわたる準備の努力を最大限生かすため、次のようなパッケージ化を進めてきた。つまり、展示とともに、1) 単なるカタログでなく、パネルでは尽くせない内容も書き込んだ企画展の解説書籍の出版、2) 展示解説ツアーの開催や展示テーマと関連したレクチャー・シリーズ等の開催、そして 3) 効果的な広報である。このパッケージ化は 2004 年春季企画展において初めて試みられ成功した。発足間もない京都大学フィールド科学教育研究センターが全力を挙げた企画展「森と里と海のつながりー京大フィールド研の挑戦ー」では、センターの教員・事務職員・技官が「パネルは簡潔に、盛り込めない内容は書籍に、実物資料を通じて感動を、研究者が直接語りかけて正しく楽しい理解を、広報は汗してがんばれ」というスローガンのもとに丸となってこの課題に取り組んだ。文字通り京都の暑い夏の日差しの中、手分けして大学周辺の住宅、小・中学校、修学旅行生の宿泊する宿へビラを持参する努力までなされた（大野，2004）。このパッケージ化によって、市民には、展示の意図や内容がより良く伝わり、展示を企画した研究者の人柄や研究成果により親しみをもってもらうことが可能となった。その結果、3ヶ月の開会期間中に1万人という当時としては記録的な観覧者を数えることとなった。

サポーターの出現

上述のような様々な活動を行う中で、大変ありがたいことが起こった。それは、企画展、レクチャー・シリーズや夏休み学習教室など、総合博物館で行ってきた様々な事業に企画委員、講師、アシスタントなどとして関わった人たちが京都大学総合博物館を好きになり、サポーターになってくれたことである。学習教室の人気プログラムを毎年開催する方、企画展の企画委員から週末子ども博物館の講師になる方などがある。また、博物館を学部の記事や学会行事の場として積極的に活用することで博物館の認知度を高めるのに協力する方など、様々な形で博物館の事業を積極的にサポートしてくれる。

地域とのつながり

京都大学総合博物館では、生涯学習に重点をおいて社会連携を進めてきたが、そのための予算はほとんど無い。そこで、外部から様々な競争的資金を得ている。その一つに文部科学省生涯学習政策局の委託事業があり、事業の

窓口である京都府教育庁指導部社会教育課からは、つねづね親身の助言・指導をいただいている。総合博物館が生涯学習に力を入れていることが、同じ教育庁の中の様々な課に伝わるのは当然のことである。やがて、府内の学校教育にも協力してほしいとの要望が学校教育課や高校教育課から出されるようになった。

例えば、京都府では、優れた知識や経験等をもつ多様な分野の著名人を「京の子どもへ夢大使（大志）派遣事業」として府内の小・中学校に派遣し、子どもたちの心に響く授業、興味・関心や学習意欲を高める授業を行う事業を 2005 年度より実施している。総合博物館では、府からの要請を受け、この事業に直接協力するとともに、科学や情報学に関連する大学教員（「科学探偵士」、「IT の達人」）の派遣に全面的に協力している。年間 40 校近くへの派遣は、博物館の教員だけでは対応できないので、先に述べた博物館のサポーターとなってくれた先生方に相談したところ、15 名ほどが快く引き受けてくれた。そして、北は舞鶴から南は南山城村まで京都府全域の子どもたちに理科や情報学の楽しさを伝えてくれている。この事業は 3 年目を迎えているが、生徒の学習意欲を喚起し、進路や生き方を考える契機を与えるものとして評価が高く、総合博物館を中心とする社会連携の有効性を示す好例となった。なお、京都市とも京都市青少年科学センター、子ども未来館などと提携して同様の取り組みを始めている。

つながりからネットワークへ

組織発足以来 10 年、京都大学総合博物館では、多くの人たちの協力を得て大学博物館を社会と繋ぐ試みを行ってきた。これによって、総合博物館とパートナーとの繋がりが徐々に構築されてきたが、最近ではパートナー同士の連携を博物館が仲介したり、博物館がパートナーのパートナーと連携するような事例が生まれてきた。

京都のノートルダム女子学院高等学校の科学クラブは 2007 年 11 月 18 日、総合博物館で手作りの全長約 10 メートルに及ぶ「ロエトサウルス」の骨格模型を使った恐竜教室をお披露目した。彼女らは「京都産ニホンメダカと卵の観察」などのオリジナル学習プログラムを使って、月に 1 度、週末子ども博物館に講師として参加してくれているサポーターである。

オーストラリア・モナッシュ大学の Patricia Vickers-Rich 教授は、2005 ～ 2006 年に客員教授として総合博物館に滞在中、彼女らの活動に共鳴し、恐竜をテーマとした科学教材を贈呈した。高校生たちは 1 年かけて翻訳した。そして、2007 年 3 月にはモナッシュ大学を訪問し、現地で日本語版の完成を新聞記者発表した。博物館が高校生と客員教授を繋ぎ、それが巡り巡って 1 年後に新たな教材プログラムを子ども博物館にもたらしたのである。

総合博物館の企画展の解説書の出版を何度も手がけてくれている京都大学出版会は、他にも興味深い学術書を多

数出版している。それらを紹介する場として、総合博物館のレクチャー・シリーズに着目し、執筆予定者や既刊書籍の著者の中からとりわけお薦めの講師を選びすぐって、2007 年秋にレクチャー・シリーズ 3 回とワークショップ 1 回を共催した。当然のことながら、聴衆の反応は非常に良かった。この連携は、博物館に優れた講師を、講師には潜在的読者の好反応によって自信を付ける場を、そして出版会には企画の事前・事後の評価の場をもたらしたのである。

これらの例は、博物館と複数のパートナーが智慧を出し合うと、個々で活動するより何倍もの効果を上げ得ることの具体例であり、総合博物館では、個々のパートナーと培ってきた連携をさらにネットワークへと紡いでゆく努力をするつもりである。

日本の教育の将来を見通した社会連携中期目標

組織が発足してほぼ 10 年が経過し、ようやく生涯学習関連事業についての多様な経験が蓄積でき、また地域社会とのネットワークも構築でき始めた。これらの資産を活かして、京都大学総合博物館は日本が抱える教育の問題についても、その解決にむけた具体的な提言をできるようになりつつある。

現在の日本には、教育を巡って二つの大問題がある。大学での博士浪人の急増と子どもたちの学力低下である。大学院重点化の結果急増した博士浪人の数を減らすことを目的に、文部科学省は、大学において今後立ち上がる重点研究プロジェクトでは大学院生にサイエンス・コミュニケーション力をつける教育プログラムを用意することを要求している。総合博物館がオリジナル教材の開発等で培った高度な内容を平易に伝えるノウハウは、そのまま大学院生のサイエンス・コミュニケーション能力の養成に利用できる。また、週末子ども博物館のスタッフや企画展のガイドとしてサイエンス・コミュニケーション能力を実地に鍛錬できる機会も提供できる。すでに複数の COE プロジェクト申請チームから協力要請があり、博物館に協力してくれているサイエンス・コミュニケーションの専門家の力も借りつつ、具体的な教育プランの検討に着手している。

子どもたちの考える力の低下が昨今取りざたされているが、改善は現場の教員の関与抜きには起こりえない。総合博物館では、数年前から京都の小学校の教員有志との連携を開始し、準備期間を経て 2007 年秋には博物館のオリジナル学習プログラムを学校現場で活用しやすい形に改良するプロジェクトを開始した。幸いこれまでの活動が認められて、京都市教育委員会や京都大学大学院教育学研究科の専門家との連携プロジェクトとなった。ユニークなのは、題材が理科的な学習プログラムであるが、その改良には美術好きの教員なども参加していることで、彼らの活躍で本物そっくりな化石のレプリカを作ることができたりする（図 3）。専門性が無いことが批判される小学



図 3. 子どもが感動する学習教材をつくる。京都大学総合博物館のオリジナル教材を現場で利用できるように作った多数の三葉虫化石レプリカを彩色する教員。

校教員だが、このプロジェクトは、興味の幅の広い小学生たちに対応して勉強の動機付けができるのは、ジェネラリスト的素養をもった小学校教員集団以外にないことを再認識させるきっかけになるかも知れない。

さらに、先に述べたような育成プログラムでコミュニケーション力を身につけた大学院生を講師として派遣すれば、彼らの研究への熱意が心に直接響き、子どもたちの学びに対する強烈な動機付けにつながるに違いない。これは、いま国が行っている大学と学校の連携事業の中で制度に大きな変更を加えることなくすぐ実践できることであり、現在、各方面にその実現を働きかけている。

まとめ

10 年前、京都大学総合博物館が発足したとき、わずかな人数の教員と事務職員しかおらず、予算も限られた組織で大学博物館を維持してゆくにはどうしたらよいのか真剣に考えた。大学博物館のミッションは、社会連携はもちろん、標本の維持管理、その研究・教育への活用など、どれをとっても重要なものばかりである。ただし呼吸や摂食・排泄と同様、その営みは地味であり活動の重要さは認知されにくい。そこで、学校教育も含めた広い意味での生涯学習を通じて社会と連携することで、年令を超えた博物館のファンを作り出すのが博物館の生き残り策、振興策として一番近道であるというのが当時の結論であった（大野，1998）。

10 年が経過した現在、複数のオリジナル学習プログラム、催しの企画・開催ノウハウ、さらに学内外の研究者・

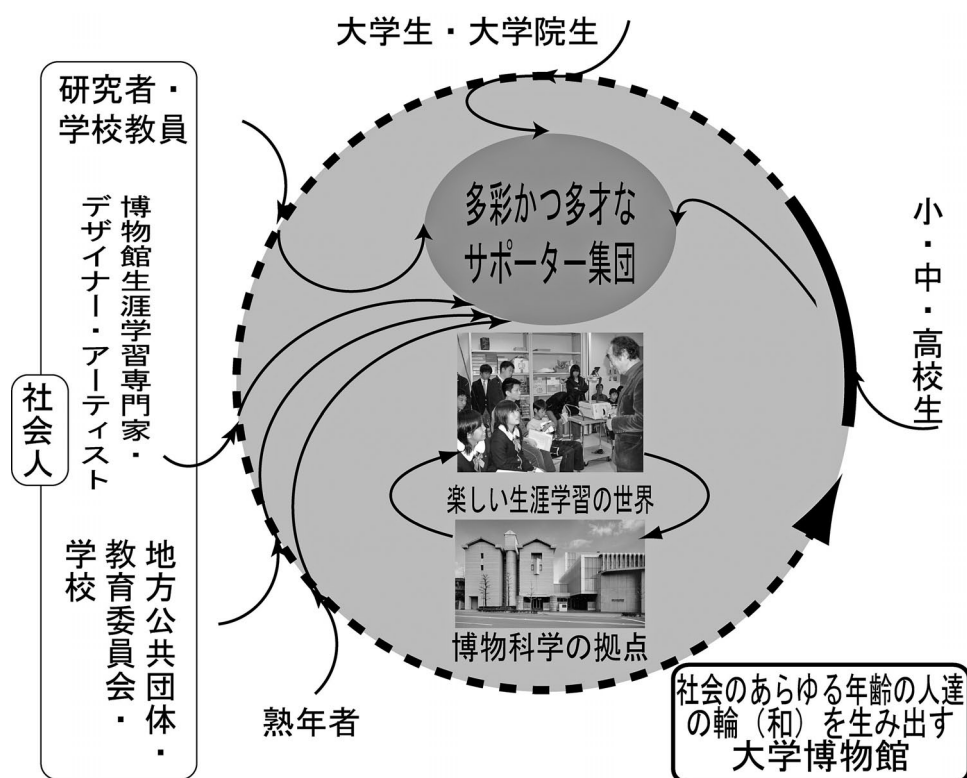


図4. 生涯学習を通じてあらゆる年齢の人達の輪(和)を生み出す京都大学総合博物館。設立10年で、小・中・高校生、大学生・大学院生、研究者・学校教員、博物館学習専門家・デザイナー・アーティスト、地方公共団体、教育委員会、学校が、総合博物館に集い始めた。そして、総合博物館が提供する生涯学習プログラムを楽しむと同時にサポート集団ともなりつつある。10年かけて紡いだ子供たちとの繋がり(図の円の外周太線の円弧)は、あと50年の後には、一巡し、現在は点線で示された部分も、さらに太い絆となり、同時に市民とのネットワークもより密接なものとなり、総合博物館は社会に不可欠な存在として生き続けられるだろう。

教員・学生、生涯学習スペシャリストなどのサポート集団、あるいは府や市の教育委員会を初めとする機関との繋がりなど、生涯学習に関して新たな資産が蓄積し始めている。そして、子どもたちから熟年者まで様々な年齢の人たちが総合博物館の提供する生涯学習機会を利用し始めている(図4)。

このような地道な努力を続けてゆくことで、学びの楽しさを知った子どもたちが大学へ進学し、モノに立脚する学問を真摯に学びつつ博物館のサポートをしてくれるだろう。その中からは我々の学問の後継者が生まれるだろう。また博物館の意味を理解して社会に出る人たちは博物館と社会の新たなネットワークの構築にも力を貸してくれるだろう。いずれ熟年になれば友達や孫を連れて博物館に帰ってきてくれるはずである。このようなサイクルが回り始めれば、博物館は社会の認知の中で生き残り、一步一步理想の姿に近づいて行けるはずである。博物館を中心としたこのような正の循環が社会に定着するように、今後とも生涯学習を要にした社会連携活動に努力して行きたいと思う。総合博物館が創設されたときの小学1年生が熟年になって初めて一巡し、この見通しの正しさが検証されるまで、あと50年である。地質学的時間尺度からすれば、わずかな期間の努力で結果が出せる。

文献

- 京都大学総合博物館, 2004. レクチャー・シリーズ 30 回目開催. 京都大学総合博物館ニュースレター, (19), 6-9.
- Normile, D., 2001. Academic collections: Japan shakes the dust off treasure trove of specimens. *Science*, **292**, 1477.
- 西谷克司, 2007. 科学イラストについて思うこと. 京都大学総合博物館ニュースレター, (22), 4-7.
- 大野照文, 1998. 大学博物館が研究以前に行わねばならないこと. 地学雑誌, **107**, 836-843.
- Ohno, T., ed., 2002. International Symposium on Symbiosis between University Museum and Society, March 30 and 31, 2002. 69 p., The Kyoto University Museum (sponsored by The Kyoto University Foundation), Kyoto.
- 大野照文, 2003a. 三葉虫を調べてみようー大学博物館における初等・中等教育への取り組みの一例. 国立民族学博物館・博物館教育国際シンポジウム「自由な学びを支援するにはー英米の博物館事例に探るー講演記録・論文集, 78-85, 岐阜大学教育学部, 岐阜.
- 大野照文 編, 2003b. 平成 14 年度文部科学省科学系博物館教育機能活用推進事業による受託事業「三葉虫を調べてみようー大学博物館でつくる仮説から検証への科学的考え方の基礎能力」報告書, 109p., 京都科学系博物館教育機能活用推進事業実行委員会, 京都.
- 大野照文, 2004. 平成 16 年春期企画展によせて. 京都大学総合博物館ニュースレター, (18), 4-6.
- 大野照文 2007a. 大学博物館がつくる学習プログラム. 京都大学総合博物館ニュースレター, (22), 4-7.
- 大野照文 編, 2007b. 平成 18 年度独立行政法人科学技術振興機構地域科学館連携支援事業「生命の歴史の立体絵巻を作ろう」報告書, 30p., 京都大学総合博物館, 京都.

大野照文, 2007c. 博物館で学びの起こるとき. 広瀬浩二郎編著, だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム, 131-144, 読書工房, 東京.

大野照文・川上紳一・田口公則・染川香澄・磯野なつ子・たけうちかおる, 2003. 小学生を対象とした化石教室「三葉虫を調べよう」のねらいとその実践. 岐阜大学教育学部研究報告(自然科学), 27, 131-137.

大野照文・織谷仁美・たけうちかおる 編, 2004. 平成 15 年度文部科学省科学系博物館教育機能活用推進事業による受託事業「体験学習プログラム：二枚貝を調べようー大学でつける仮説から検証への科学的考え方の基礎能力」報告書, 108p., 京都科学系博物

館教育機能活用推進事業実行委員会, 京都.

大野照文・織谷仁美・染川香澄・小原千夏・たけうちかおる 編, 2006. 平成 17 年度文部科学省「社会教育活性化 21 世紀プラン」受託事業「京都大学総合博物館国際シンポジウム：博物館で学びが起こるとき」報告書, 172p., 21 世紀社会教育活性化京都委員会, 京都.

大野照文・織谷仁美・たけうちかおる 編, 2006. 平成 17 年度文部科学省「社会教育活性化 21 世紀プラン」受託事業「京都大学総合博物館：おとなが学ぶ二枚貝“貝体新書”一貝を題材に熟年者が他世代とともに学べる学習プログラムの開発と実践」報告書, 172p., 21 世紀社会教育活性化京都委員会, 京都.

